

巻 頭 言

2013年夏とドッグターだった頃

仙台青葉学院短期大学学長
藤 村 重 文

2013年は異常気象の年である。冬は寒かったうえに降水量が多く、北日本では記録的な積雪があった。春の花の開花は梅が平年より29日遅かったものの、桜は平年よりも4日遅い程度で、梅雨期も約1週間先延ばしされたような状態であったが、梅雨明けとともに日本列島は南の方から猛烈な記録的熱波に見舞われた。今年の夏は熱中症のことが連日のように報道されたのもこれまでなかったことである。

この夏の猛烈な暑さのなかで、若かった頃の暖冷房が備わっていなかった外科実験室での犬を用いた実験のことをしばしば思い出した。

筆者は、1963年東北大学抗酸菌病研究所外科（現東北大学加齢医学研究所）に大学院生として入局し、大学院終了後助手（19年間）として呼吸器外科の診療と研究に従事し、1989年教授に就任したが、とくに大学院生と助手（現助教）であった20数年間は肺移植の実験研究を集中的に行うことができた。肺移植実験では当初からイヌがよく用いられ、1980年代以降はラットやニホンザルも用いられるようになったが、筆者自身の実験動物は主としてイヌであった。真冬は日中作成した肺移植モデルは、夜間凍死することが多かった一方、真夏は正式な手術着を着ての実験や術後管理には大変な努力が必要で、その暑い時のつらさがよく思い出されるのである。しかし夏期の実験モデルは世話を焼けばそれだけ成功率は高かった。実験モデルのなかでは自家肺移植後5年あるいは6年という期間を自分自身で濃密に世話をしたシェパードとラブラドル・レトリバーによく似た毛長の大型犬の2頭のことは昨日のようにはっきりと思い出される。

現在は、大型・中型の動物を用いた実験は困難な状況になっているが、これらを用いた動物実験は、種々の医学技術向上にも欠かせないと今もなお思っている。

筆者の恩師の教授は呼吸器外科草創期の泰斗で、教授には「君たちはドクターじゃなくドッグターだ」とよく言われたものである。

暑さや寒さをものともせず実験研究に励んだ時期は遠い昔になってしまったが、その研究生活には悔いはなく、懐かしく思うのである。